平成 26 年度　「大阪府中学生チャレンジテスト」における新東淀中学校の結果の分析について

大阪府による「大阪府中学生チャレンジテスト」について、平成 27 年１月 14 日（水）に、第１学年と第２学年を対象として、教科に関する調査と生徒アンケートを実施しました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科も含め、総合的に生徒の学力向上をめざしています。学校の現状や取組の参考にしていただきたいと思います。

1　調査の目的

① 大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより大阪の生徒の課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。

② 大阪府教育委員会が、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学者選抜における評定の公平性を担保する方策（「評定の範囲」の作成）について検証する。

③ 大阪市教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、学力向上のための PDCA サイクルを確立する。

④ 学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。

⑤ 生徒一人一人が、自らの学習到達度を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

2　調査の対象

- 大阪府内の市町村立中学校、特別支援学校及び府立支援学校中等部の第１学年、第２学年
- 新東淀中学校では、第１学年２０９名、第２学年１８４名

3　調査内容

① 第１学年で、国語、数学及び英語
　第２学年で、国語、社会、数学、理科及び英語

② 生徒アンケート

平成26年度「チャレンジテスト」検証シート

学校名	大阪市立新東淀中学校

【 第 1 学 年 】

生徒数（人）	209

平均得点（点）

	国語	数学	英語
学校	63.0	48.8	64.0
大阪市	61.8	52.6	66.9
大阪府	63.2	53.7	69.3

平均無解答率（%）

	国語	数学	英語
学校	4.4	8.0	5.8
大阪市	5.8	6.0	5.1
大阪府	5.4	5.9	4.9

結果の概要

国語では、話す・聞く・書くことの領域でのポイントが低く、それに対して、言語についての知識・技能・理解、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項についてはポイントが高い結果となった。数学では、各領域において、残念ながら大阪府・大阪市のポイントを下回っており、無回答率も高い結果となった。英語では、平均得点では大阪市に及ばないながらも、聞くこと・読むことの領域では平均に達していたが、無回答率が平均を上回っている結果となった。

成果と今後取り組むべき課題

国語では、豊かな表現力の育成に加えて、授業での発言のあり方にスピーチ練習・意見発表など工夫を凝らしていく必要があり、書く課題を増やすことで書く能力を高めていく指導を進める。数学では、基礎・基本となる反復練習に加えて、これまで以上に学習に積極的に取り組む意識の改革を図り、基本問題から難問まで生徒自らがチャレンジしていく授業展開を進める。英語では、話す・聞く力の向上に加えて、書く力の向上を図るために、読み物教材を多用し、読解力の向上とともに、語彙力の構築を進める。

【 第 2 学 年 】

生徒数（人）	184

平均得点（点）

	国語	社会C	数学	理科A	英語
学校	61.3	47.4	46.5	46.4	48.5
大阪市	61.3	50.2	47.0	43.8	52.5
大阪府	62.9	51.9	49.4	45.4	55.0

平均無解答率（%）

	国語	社会C	数学	理科A	英語
学校	6.1	7.0	7.7	4.5	4.7
大阪市	6.2	7.7	8.3	5.3	4.0
大阪府	5.3	6.0	7.5	4.7	3.8

結果の概要

国語では、各領域のバランスは良いが、書く領域でポイントが低く、無回答率が高い結果となった。社会では、授業の進捗状況により出題範囲の歴史的分野での理解が不十分であり、無解答率が府よりも高い結果となった。数学では、平均得点が府・市の結果を下回り、得点分布においても80点以上の生徒の割合が低い結果となった。理科では、平均得点が上回り、無回答率も低く、観点別でも観察・実験の技能が高かったが、生物的領域が低い結果であった。英語では、府・市の平均を大きく下回り、読むことの領域が低く、観点別では外国語理解の能力が極めて低い結果であった。

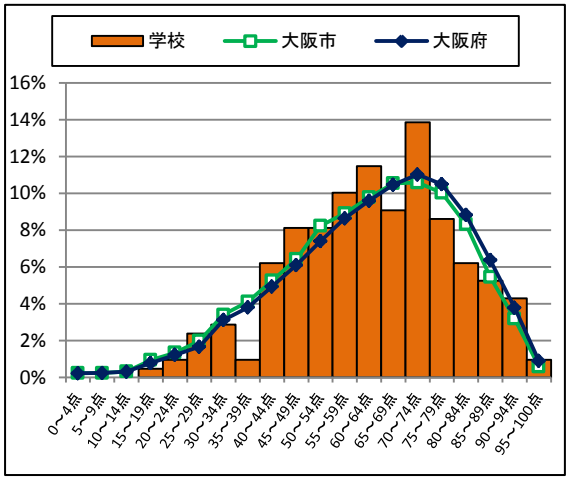
成果と今後取り組むべき課題

国語では、読む力・聞く力の向上とともに、書くことの適切な指導のための文章の効果的な構成、論理的展開、表現方法等に取り組み、記述式問題や作文問題の出題機会を増やしていく。社会では、無回答の割合は市よりは低かったが、出題範囲での問題プリントの配布に限らず、より丁寧な指導を繰り返し、年間指導計画の整理を行う。数学では、基本的な計算問題の定着とともに、授業で積極的に応用問題に取り組む時間を設定し、80点以上の生徒数の増加を進める。理科では、観察・実験の技能構築だけでなく、記述での定着が図れるよう教材研究を行う。英語では、聞く力の向上は図れてきたが、文法や語彙力等の基礎学力の定着が必要であり、言語や文化についての知識・理解の向上を図る授業展開に取り組む。

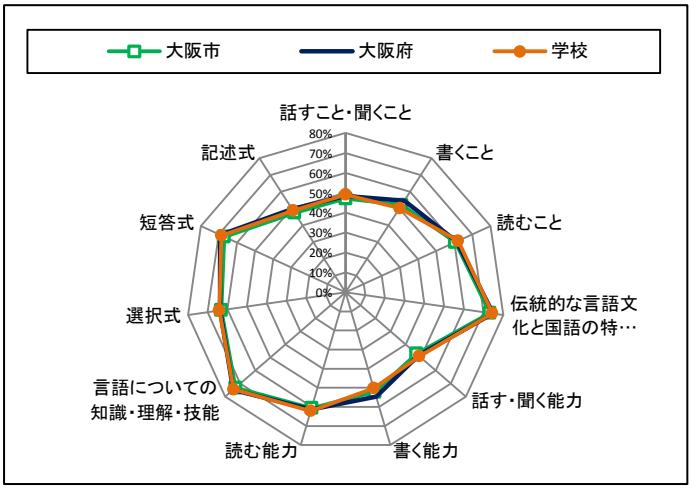
【第1学年 各教科の得点分布と領域・観点・問題形式別平均得点の分布 】

【 国 語 】

【得点分布】

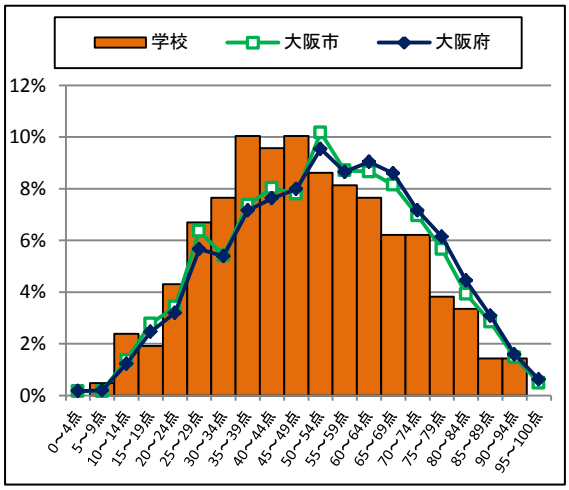


【領域・観点・問題別の分布】

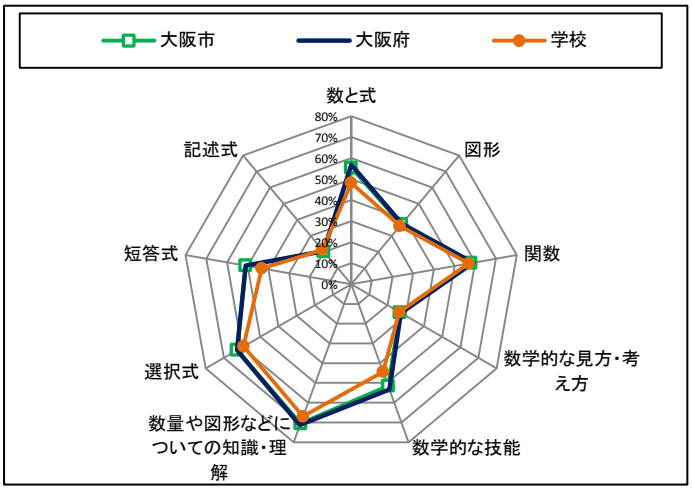


【 数 学 】

【得点分布】

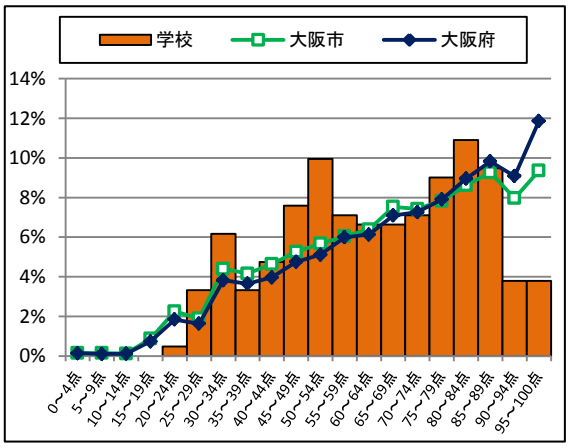


【領域・観点・問題別の分布】

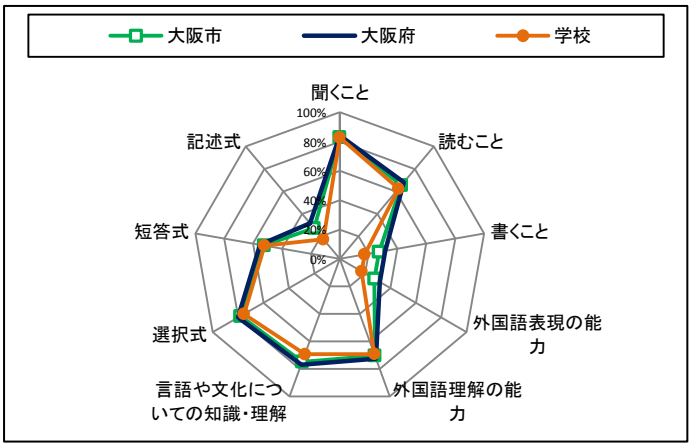


【 英 語 】

【得点分布】



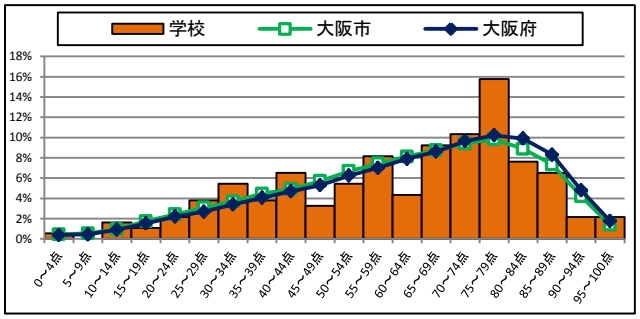
【領域・観点・問題別の分布】



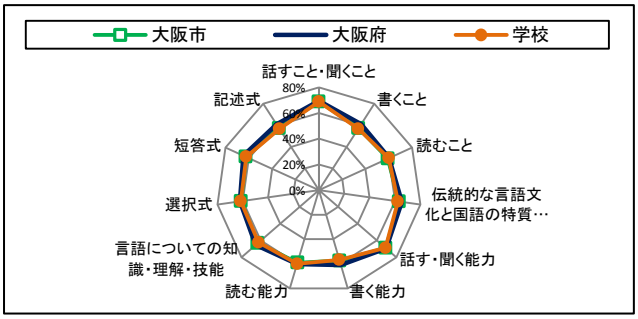
【第2学年 各教科の得点分布と領域・観点・問題形式別平均得点の分布 】

【 国 語 】

【得点分布】

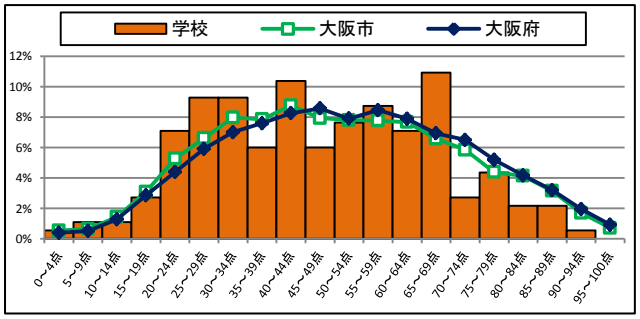


【領域・観点・問題別の分布】

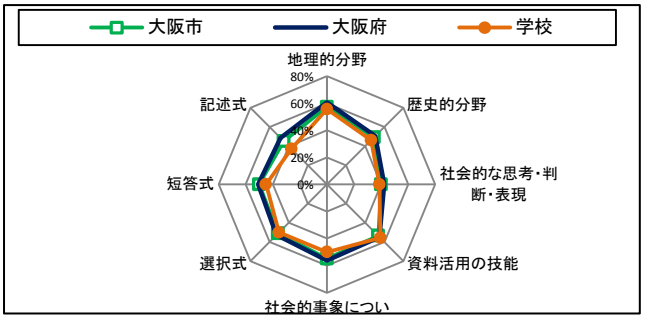


【 社 会 C 】

【得点分布】

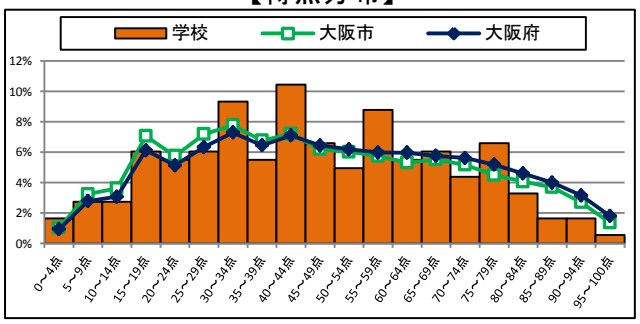


【領域・観点・問題別の分布】

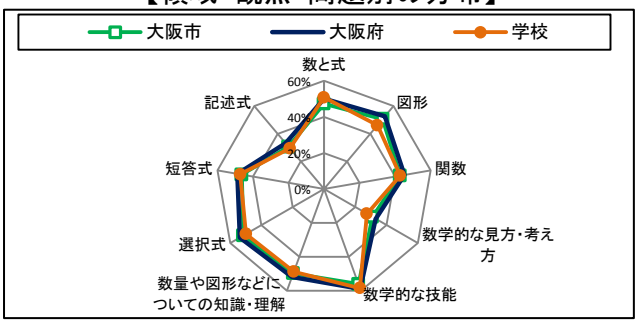


【 数 学 】

【得点分布】

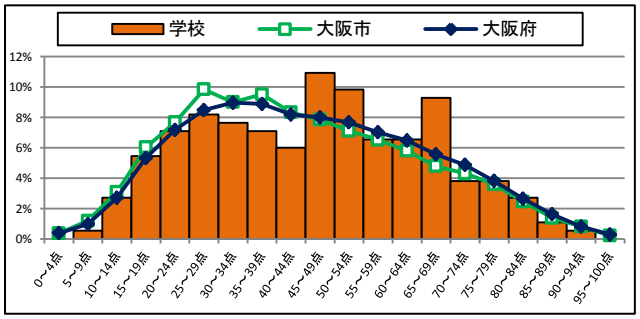


【領域・観点・問題別の分布】

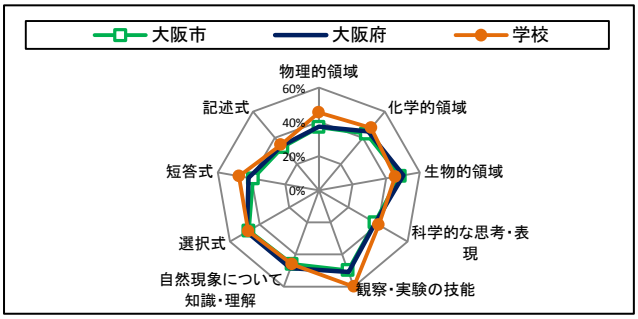


【 理 科 A 】

【得点分布】

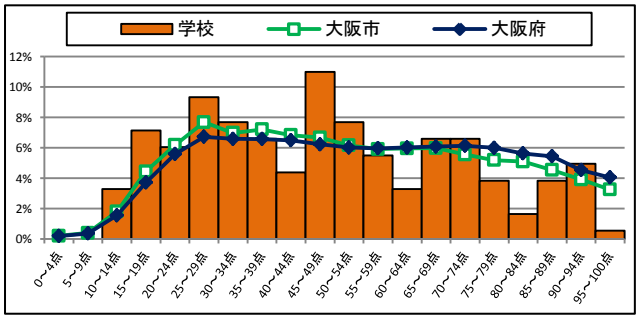
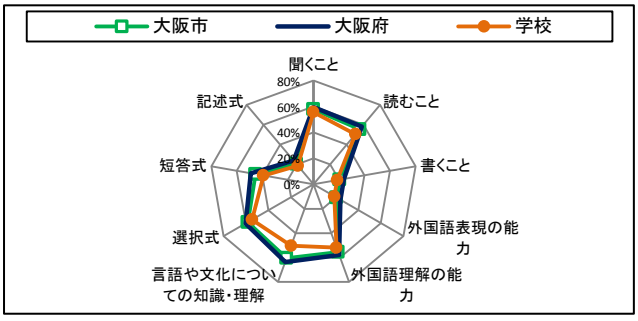


【領域・観点・問題別の分布】



【 英 語 】

【得点分布】



【領域・観点・問題別の分布】